

エッセイ特集2 ヴィクトリア朝研究の現在

コミュニティデザインがヴィクトリア時代から学んだこと

山崎 亮

◆ヴィクトリア時代に惹かれる理由

たまに「なぜ自分はイギリスのヴィクトリア時代(1837-1901)に惹かれるのか」と考えることがある。理由はいろいろある。しかし、それらがうまくまとまらないのでいつの間にか考えるのを止めてしまう。そんなことが何度かあった。建築やデザインについて面白い動きがあったからだとか、都市計画や公衆衛生の萌芽が見られるからだとか、社会福祉の源流がそこにあるからだとか、思いつくことを挙げることはできる。しかし、どれも単独では決定的な理由にならない。

確かに、私はこれまで上記の分野を渡り歩いてきた。デザインや建築の仕事を経験し、徐々に都市計画やまちづくりの仕事へと移行し、最近では公衆衛生や社会福祉の仕事が増えてきている。そのいずれもが市民参加で進めるもので、地域に住む人たち自身が地域を改善していく活動を支援することが多い。

そんな仕事のことをコミュニティデザインと呼んでいる。この種の仕事に関する歴史を遡っていくと、いずれもヴィクトリア時代にその源流を見出すことができる。「ヴィクトリア時代の知見を現代のコミュニティデザインにどう活かしたのか」をまとめた『コミュニティデザインの源流』という書籍を刊行したこともある。つまるところ、私は自分の仕事の源流がヴィクトリア時代にあると思っているし、そこから多くのヒントが得られると思っているからこそ、かの時代に惹かれているのだろうと考えているのである。

しかし今回、改めて自分がヴィクトリア時代に興味を持つ理由を考えてみたところ、人生について迷ったときに参照すべき道標として、かの時代を捉えているのではないかという気がしてきた。少し気恥ずかしいところもあるが、今回はそのあたりの感覚を記しておきたいと思う。

◆変化の時代

現代は変化の時代だといわれる。もちろん、時代は常に変化しているのだが、現代の変化はこれまでの変化に比べて大きなものだといわれている。変化の要因として代表的なものは人工知能だろう。この技術によって、これまでとはまったく違った生活や生産が実現すると予測されている。すでに語りかければ質問に答えてくれるスピーカーが発売されているし、今後はスピーカー側から人工知能が考えたことを語りかけてくるようになるという。「先ほどチャットで友達と話をしていた旅行の件、飛行機のチケットを2名分手配しておきましょうか?」といった具合だ。電話での会話やチャットでのやりとりを人工知能が読み取り、自分がやるべきことを見つけ出し、それを提案してくれることになる。「よろしく」という一言で、人工知能が適切な移動経路を検索し、必要なチケットを購入しておいてくれる。そんな時代になるらしい。

こうしたサービスを供給する企業はしのぎを削っている。グーグル、フェイスブック、アマゾン、マイクロソフト、アップル、ラインなど、すでに多くのユーザーを囲い込んでいる企業は、いずれも人工知能の研究や開発に必死だ。ほかの企業に顧客を奪われないよう、早めに人工知能を搭載したデバイスを発売しなければならない。すでにアマゾンとマイクロソフトが提携して、グーグルに対抗しようとしているとの情報も広がりつつある。いち早くこの分野を制した企業は、さらに多くのお金を手に入れることになるのだろう。関連して多くの仕事生まれるはずだ。一方、多くの仕事がこの世から消えることにもなる。多くの研究機関が「近い将来、現在の仕事の60%程度が人工知能とロボットに奪われる」と予測している。

我々の生活が大きく変わろうとしている。同時に、人工知能の市場を制した大金持ちが誕生する。逆に、多くの仕事が消滅して失業者が増える。

そんな近未来を前にして、私自身はどう生きていきたいのか。そんなことをよく考えるのだ。機運に乗じて大金持ちになることを目指し、手に入れた富を社会に還元することで充実した人生を送りたいのか。それとも時代の変化によって生じる課題を解決するためのプロジェクトに取り組むことで充実した人生を送りたいのか。いずれにしても「充実した人生を送りたい」と思っているのだが、その方法は大きく二種類に分かれている。

そこでふと思うのである。この状況はヴィクトリア時代に似ているのではないか、と。あの時代を生きていたとしても、私は同様に二つの道をどちらに進むか悩んでいたのではないかと。機械の台頭と工場の発展。これによって生まれる富を手に入れたいと思うのか、それとも社会に生じる課題の解決に取り組みたいと思うのか。死罪覚悟で工場の機械を打ち壊そうとは思わない。そうしたところで工場は増え続け、職人の仕事を奪い続けると歴史が教えてくれているからだ。人工知能が広がって多くの仕事を奪うとしても、それ故に電話線を切ったり企業のサーバーを破壊したりしようとは思えないのである。

◆トマス・カーライルとジョン・ラスキン

そう考えると「自分はどう生きていきたいのか」が明確になってくる。ヴィクトリア時代に活躍した人たちのうち、大富豪になった人よりも、機械を打ち壊した人よりも、社会の課題に取り組み続けた人たちの生き方に強く共感しているからだ。その人たちが遺してくれた思想や手法や事業、そしてその生き方自体こそが、現代に連なる大きな遺産だと感じているからだ。大きな変化が起きる時代を生きるからこそ、変化に伴って生じる課題に取り組み続け、願わくば自分も未来の世代に少しでも有益な思想や手法や事業、そして生き方を遺したいのである。

こうした人生観を教えてくれたのは、ヴィクトリア時代に活躍した美術批評家で社会改良家でもあるジョン・ラスキンである。ラスキンの「人生こそが財産である」という言葉から、その財産をどう使うべきかを考えるようになった。自分が設立した会社(studio-L)の名称に人生(Life)の頭文字を入れたのも同様の理由からだ。コミュニティデザインを通じて関わる

地域住民が、それぞれが持つ財産としての人生を最大限に活かすことができれば、地域課題は少しずつ解決するのではないかと信じている。こうした考え方を国全体の政治や経済にまで広げて語ったのが、ラスキンの『この最後の者にも』である。「ラスキンは美術批評だけしていればいいものを」と揶揄されながら、政治や経済について語った意欲作である。

ラスキンに影響を与えた人のひとりにはトマス・カーライルだろう。カーライルは過去の英雄の生き方を調べ、変化の時代に登場する次世代の英雄に期待した。英雄が登場しやすい社会をつくることを推奨したともいえる。社会はすでに変化を必要としている。しかし、これまでの制度や慣習が窮屈な服のように社会にまとわりついている。これを脱ぎ捨てて、新しい服を仕立て直さねばならない。そうすれば、社会の変化に対応した英雄たちが登場することだろう。カーライルは、過去に登場した英雄と、そのときの社会状況に着目しつつ、これからの社会のあり方を論じた。

カーライルが注目した過去は中世だった。カーライルだけではない。同時代に建築家のオーガスタス・ピュージンも『対比』のなかで中世の社会がいかに素晴らしかったかを喧伝した。カーライルの弟子を自称するラスキンは、ピュージンの中世礼賛に「やりすぎだ」と苦言を呈しながらも、やはり中世の社会には学ぶべき点が多いとしている。特に、職人たちが同業者組合(ギルド)を組織して、楽しみながら働くことができた社会のあり方を評価した。

◆ウィリアム・モリスとオクタヴィア・ヒル

ラスキンの弟子を自称するウィリアム・モリスは、同じく中世の働き方を評価した。しかし、彼の時代には職人の仕事が機械に奪われつつあった。モリスはデザイナーとして多くの製品をデザインしたが、いずれも工場の機械で作られるものではなく、職人が工夫しながら楽しく作ることができる製品とした。彼の工房は職人たちのギルドとなり、良質な製品が多く生み出されることになったが、機械で作られた製品に比べて高価になってしまった。人々が美しい製品に囲まれて生活することは重要だが、それを作る職人もまた楽しみながら仕事ができることも大切である。実際には金持

ちしか買えない高価な製品を作ってしまうモリスは、美しい製品を安価に供給することができない社会自体を変えなければならないと考えた。そのためなら小説も書くし、社会主義運動にも参加する。晩年のモリスは、ラスキンと同様に社会改良家として活躍した。

モリスは多くのデザイナーに尊敬される存在だった。ウィリアム・レザビーやウォルター・クレインなど、モリスの後輩たちはアーツ・アンド・クラフツ運動を展開し、美しいデザインと職人の働き方の両立を目指した。一方で、美しいデザインを安価に実現するため、機械の導入もやむなしと考えるデザイナーも登場する。アーツ・アンド・クラフツ運動に参加するデザイナーたちのなかにも、そういう考え方が広がるようになる。チャールズ・アシュビーもまた、モリスを尊敬するデザイナーのひとりだったが、製品が高価になるのはロンドンの賃料や食費が高すぎるからだと考え、50人の職人とその家族150人を連れてチップング・カムデン村へ移住した。賃料や食費は格段に安くなったものの、同時に製品の注文も激減することになり、結果的に彼は機械時代に応じたデザインを開発することになる。こうした考え方は、ドイツのバウハウスやアメリカのフランク・ロイド・ライトなどに伝わり、世界的なモダニズム運動へとつながっていく。

ラスキンが影響を与えたのはモリスだけではない。オクタヴィア・ヒルもそのひとりだ。彼女は時代の変化によって職を失ったり、工場の低賃金労働に従事したりする人たちが生活するための住宅を整備する事業を立ち上げた。住宅に関する仕事は、ラスキンの講演をまとめた『ごまとゆり』の中に登場する「女性が携わるべき仕事」である。ヒルはラスキンの投資によって小規模な住宅を手に入れ、そこに低所得者たちを住まわせることから事業を始めた。その後、都市にオープンスペースを確保する運動や、古い建築物を保存する運動などを牽引し、同じくラスキンの影響を受けていたハードウィック・ローンズリー司祭、ロバート・ハンター弁護士とともにナショナルトラストを設立する。ナショナルトラストは現在でも活動しており、英国内の豊かな自然環境や古い建築物などを保存する運動を展開している。また、ヒルは「ケースワークの祖母」と呼ばれており、貧困者を訪れて生活改善を支援する手法が現在の社会福祉分野で高く評価されている。

◆アーノルド・トインビーとトインビーホール

ラスキンの影響は、アーノルド・トインビーにも伝わっている。大学時代にラスキンの授業を聴講していたトインビーは、貧困地域に住み込んで地域の課題を解決する活動を開始した。いわゆるセツルメント運動である。「産業革命」という言葉を広げた学者として有名なトインビーは若くして亡くなってしまったが、その遺志はセツルメント運動の同志たちに引き継がれている。サミュエル・バーネット司祭と、その妻であるヘリエッタ・バーネットは、世界初のセツルメントハウスであるトインビーホールを設立した。ヘリエッタはオクタヴィア・ヒルとともに住宅改善運動に携わっていた女性であり、トインビーホールを設立した後はハムステッド田園郊外という住宅地を開発している。この住宅地は、ラスキンやモリスの影響を受けたエベネザー・ハワードが開発したレッチワース田園都市と並ぶ優良住宅地として現在でも人気だ。また、その開発手法は都市計画の教科書に掲載されて世界中の手本とされている。

バーネット夫妻が設立したトインビーホールでは、前述のチャールズ・アシュビーがラスキンの著書を題材にした読書会を開催していた。また、アシュビーが主宰する貧困住宅の調査である「ロンドン踏査」や、チャールズ・ブースによる貧困生活の実態調査である「ロンドン調査」が行われた。ブースの友人だったシーボーム・ラウントリーは、ブースの手法を援用して「ヨーク調査」を行った。この2つの貧困調査は、のちに社会福祉の必要性を説明するための重要なデータを示すことになる。また、ブースは年金制度の基礎をつくることにもなる。

ブースの親戚にビアトリス・ポッター(ウェップ)という女性がいる。トインビーホールで行われたブースの「ロンドン調査」に参加したビアトリスは、シドニー・ウェップと結婚し、協同組合の歴史を研究し、その結果として社会主義運動を推進することになる。ウェップ夫妻は基礎的な市民生活を国が支える「ナショナルミニマム」という考え方を提示した。同時に、フェビアン協会の活動を通じてイギリス労働党の福祉に関する考え方を取りまとめた。こうした考え方は、現在のイギリス労働党においても基礎的な概念として引き継がれている。

◆変容し続けること

変化の時代には2つの生き方が選択可能だ。変化を追従する生き方と、変化の反作用に対応する生き方である。もちろん、両者を組み合わせた生き方も可能だろう。変化を先取りして富を得たのちに、その富を使って変化の反作用に対応するという生き方である。しかし、変化の先取りが反作用を生み出していたことを知っている限り、この種の生き方で満足できるとは思えない。そう考えると、選択したい人生は「変化の反作用に対応する生き方」ということになる。

現代と同様に変化の時代だったヴィクトリア時代には、変化の反作用に対応した偉人たちがたくさん出現している。そして、その人達がお互いに影響を与え合っている。カーライルからラスキン。そして、ラスキンからモリス、ヒル、トインビー。さらに、モリス、ヒル、トインビーから後進たちへの影響。こうした影響が、時を超えて現代のデザインや都市計画や公衆衛生や社会福祉の基礎となっている。コミュニティデザインもまた同様の基礎のうえに成り立っているといえよう。

同時代のロンドンで互いに影響を与えあっていた偉人たちに習って、我々もまた現在の日本において「時代の反作用」に対応しながら生きている人たちとつながりたいものだ。きっと多くを学ぶことができるし、優れた協働が実現するはずだ。そして、そのなかから後世に遺すべき思想や手法や事業を生み出すことができれば、我々も少しは社会に貢献できたのかもしれないと感じられることだろう。そのためには、時代の変化や他者からの影響に応じて、自分の仕事を次々と変容させることも必要になるだろう。ヴィクトリア時代の偉人たちが、必要に応じて自身の仕事を変容させ続けたように。

— studio-L 代表 / コミュニティデザイナー